

平成30年度に採択した課題 一覧

課題名	期間	研究代表者	所属	評価	研究評価委員会 総合コメント	継続の可否
短寿命 α 線核種の合理的規制のためのデータ取得による安全性検証と安全管理・教育方法の開発	平成29年～30年	篠原 厚	大阪大学	A	ガイドライン策定の際に取り入れられるべき重要な知見が得られている。報告書においては、実験データに影響を与える因子にも言及されたい。	(平成30年度で終了)
短寿命 α 核種等の RI 利用における合理的な放射線安全管理のあり方に関する研究	平成29年～30年	細野 眞	近畿大学	B	報告書においては、海外法令との関係や他のRIに対する規制との関係に言及する等、もう少し踏み込んだ内容にすべきである。	(平成30年度で終了)
加速器施設の廃止措置に係わる放射化物の測定、評価手法の確立	平成29年～30年	松村 宏	高エネルギー加速器研究機構	A	廃棄物低減化技術として重要であり、廃止マニュアルを完成されたい。また、代表的な施設だけでなく、より多くの施設に対するヒアリングを追加し、標準化の段階まで進めることを期待する。	(平成30年度で終了)
原子力・医療従事者等の標準的な水晶体の等価線量モニタリング、適切な管理・防護はどうあるべきか?～水晶体被ばくの実態から探る～	平成29年～30年	横山 須美	藤田医科大学	B	原子力発電所における実態把握はある程度達成されているが、医療関係の調査が不十分である。また、もうひとつの目的である「適切な管理のあり方の検討・提案」については言及されておらず、報告書にはきちんと記述されたい。	(平成30年度で終了)

水晶体の等価線量限度の国内規制 取入れ・運用のための研究	平成 29 年 ～30 年	千田 浩一	東北大学	B	様々な術技、医師、放射線技師、看護師をカバーしており、有用な情報を提供している。横山班と連携して実効性のあるガイドラインの策定を期待する。なお、報告書には「政策の活用・提言」を記述されたい。	(平成 30 年度 で終了)
眼の水晶体等価線量評価に用いる線 量計の試験校正手法の開発	平成 29 年 ～30 年	加藤 昌弘	産業技術総 合研究所	A	線標準場を確立したことは大きな成果である。今後の校正システムとしての整備を期待する。	(平成 30 年度 で終了)
「放射線業務従事者」としての「指定」 の在り方に関する検討:原子力施設 等と医療施設の比較	平成 29 年 ～30 年	草間 朋子	東京医療保 健大学	B	医療における実状を調査した成果は高く評価できる。病院、診療所の属性等を併せた分析を追加されたい。	(平成 30 年度 で終了)
内部被ばく線量評価コードの開発に 関する研究	平成 29 年 ～32 年 (2 年目)	高橋 史明	日本原子力 研究開発 機構	A	昨年の評価委員会からのコメントにも対応しており、スケジュール通りに進むことを期待する。なお、最終的に公開するにあたり、ユーザーへの説明や十分に理解してもらうための方策も検討されたい。	継続
原子力事故時における近隣住民の確実な 初期内部被ばく線量の把握に向けた包括 的個人内部被ばくモニタリングの確立	平成 29 年 ～31 年 (2 年目)	栗原 治	量子科学技 術研究開発 機構	C	初期モニタリングのシステム確立は重要である。現時点での性能・使用状況等における新型検出器の優位性を明確化するとともに、新型検出器の開発に注力すべきである。	継続
事故等緊急時における内部被ばく線 量迅速評価法の開発に関する研究	平成 29 年 ～31 年 (2 年目)	谷村 嘉彦	日本原子力 研究開発 機構	B	測定器・測定手法の開発と言う点では順調に進んでいる。治具の設計においては、海外調査の情報、及び材料のヒトに対する安全性、精度の確保等にも配慮されたい。	継続

放射線防護研究分野における課題解決型ネットワークとアンブレラ型統合プラットフォームの形成	平成 29 年 ～33 年 (2 年目)	神田 玲子	量子科学技術研究開発機構	A	アカデミアと規制当局の橋渡し及び学会間のネットワーク形成という目的に向かって順調に進んでいる。なお、人材育成については、長期的な視野に立って実質的な取組みとなるよう検討されたい。	継続
健全な放射線防護実現のためのアイソトープ総合センターをベースとした放射線教育と安全管理ネットワーク	平成 29 年 ～33 年 (2 年目)	篠原 厚	大阪大学	B	非密封RI利用に関する大学の拠点化・ネットワークの拡大は重要である。一方で、「分子イメージング技術利用推進検討会」のサブテーマでは安全管理が付随的であり、本サブテーマの見直し及びRIセンター長会議との役割分担の明確化について検討されたい。	継続
放射線業務従事者に対する健康診断のあり方に関する検討	平成 30 年 ～31 年 (1 年目)	山本 尚幸	原子力安全研究協会	B	長年手が付けられていなかった重要な課題である。調査結果を踏まえ、どのような結論、提案を行うか到達点を明らかにすべきである。健診のあり方に関する提言、提案に生かされることを期待する。	継続
包括的被ばく医療の体制構築に関する調査研究	平成 30 年 ～32 年 (1 年目)	富永 隆子	量子科学技術研究開発機構	B	原子力災害とテロ、放射線施設の対応の相異を、現実的な対応と言う観点から整理されたい。	継続
染色体線量評価手法の標準化に向けた画像解析技術に関する調査研究	平成 30 年 ～31 年 (1 年目)	数藤 由美子	量子科学技術研究開発機構	B	スケジュール通りに進捗している。標準化された染色体画像解析技術の適用対象を明確にすること、及び AI 技術については他分野の先行事例を取り入れることも検討されたい。	継続

原子力災害拠点病院のモデル BCP 及び外部評価等に関する調査及び開 発	平成 30 年 ～31 年 (1 年目)	永田 高志	九州大学	B	原子力災害拠点病院の BCP 策定という目的は理 解できるが、緊急対応との関係、及び外部評価・ リスコミ等との関係を明確にすべきである。なお、 リスコミの研修には座学に加えて実学が必要なの で、実績のあるコミュニケーターとの協力が必要 ではないか。	継続
環境モニタリング線量計の現地校正 に関する研究	平成 30 年 ～31 年 (1 年目)	黒澤 忠弘	産業技術総 合研究所	B	現場での機器校正は重要な課題のひとつであ る。精度とともに確度の確認ができるような工夫 を期待する。	継続

* 評価基準： A：一層の推進を期待、B：現状通り実施、C：計画を修正して実施、D：中止すべき